

根元的解釈と 日常的コミュニケーションにおける発話理解との相違 —あるいは観念論者としてのデイヴィドソン—

佐藤 邦政

はじめに

ドナルド・デイヴィドソンは根元的解釈において、言葉の意味を解釈という観点から原理的に説明しようとしている。後になって、彼は日常のコミュニケーションにもこの解釈図式を適用し、それに基づいて会話の発話理解もなされると主張しているように思われる。それはおもに「規約とコミュニケーション」、「墓碑銘の素敵な乱れ」、「言語の社会的側面」の論文において見られる。デイヴィドソンの解釈図式に基づいた会話における発話理解の描写はうまくいっているのか。本論文では、解釈図式が非意味論的な音の知覚と解釈によって導出される意味との二元的な措置に基づいていることを確認し、そのことから第一に、意味理論（理解）が解釈者から想定されるものに過ぎない可能性があること、第二に、解釈者は自分の意味理論と話し手のそれとが一致しているという認識的に正当化された信念を持たないことを明らかにする。もしこの私の分析が正しければ、日常のコミュニケーションにおいては、根元的解釈による解釈図式とは異なる仕方によって理解がなされている必要がある。最後に、知覚による理解の仕方について簡潔に示唆したい。

1. 根元的解釈と日常のコミュニケーション理解

(1) 根元的解釈

デイヴィドソンは「意味とはなにか」という問題を「真理と意味」の中で真理条件の意味理論（初期条件（公理）と導出規則）を探究するという問題へと変える。意味理論がうまくいくために、クリアすべき条件として、形式的制約と経験的制約が挙げられる¹。形式的制約とはタルスキの真理理論や合成原理、

再帰性などを指しているが、意味理論そのものに課される制約であるためここでは扱わないことにする。一方、経験的制約としてデイヴィドソンが挙げたものは、言語に対する意味理論は私たちが利用可能な証拠だけに基づいて構築可能なものでなければならないというものである。このような問題の考察のために設定されたのが、根元的解釈という状況である。

ほかの多くの人々と同様、私は「意味とはなにか」という質問に答えようとしたかったが、(略) [他の哲学者たちの] 試みのあまりにうまくいかない様子を挫折感を味わうことになった。だから私は、それより扱いにくいことはないだろうと思われた次のような別の問題に答えることにした。それは、「解釈者が未知の言語の話し手を理解するために十分な条件とはどのようなものであるか。そして、解釈者はそれをいかにして知ることができるのか」という問題である (カギ括弧内引用者補足、以下同様)²。

根元的解釈という状況設定によって、言語の解釈に成功したと言えるのに必要な制約を探るということが目指されていることがわかる。注意が必要なことは、デイヴィドソンの目的は実際の状況において話し手の言葉を理解するという経験的・心理学的な考察ではないということである。根元的解釈という仮想状況を設定することによってデイヴィドソンが目的とするのは、構築しようとしている意味理論が経験的に確認できるような理論的制約について考えることである。

根元的解釈においては、意味は解釈されたものであるということがプログラムの出発点とされる。それでは、解釈するにあたって解釈者が知覚するものはどのようなものとみなされているのか。デイヴィドソンによれば、解釈者が他者の発話の意味についての理論を構築していく際に利用できるもの(話し手の発話や振る舞いなど)は非意味論的なものであるとされる³。

根元的解釈では、理論は前もって与えられていない特定の発話の理解を提供するものとされる。(略) 一般的な場合を扱うために、その証拠はその理論が扱おうとしている発話の解釈の仕方をまだ知らない人が利用できるよ

うなものでなければならない。具体的には、意味、解釈、同義といった言語的な概念を使用することなく記述できるような証拠でなければならないということである⁴。

根元的解釈における二つ目の条件は、発話の意味理解のためには根元的解釈で示される方法、すなわち解釈図式が唯一の方法であるということである。もし解釈図式と異なる方法によって、言語の意味についてより多くのことを知ることが可能であるならば、デイヴィドソンの主張は、意味理解にいたる一手段に過ぎなくなってしまう、簡単に棄却可能な主張になってしまう。デイヴィドソンは根元的解釈者による発話理解について次のように述べている。「得ることのできる情報をすべて持っている解釈者が知りえることが、話し手が何を意味しているのかについて知りえることのすべてである。このことは話し手の信念についても同様のことが言える」⁵。理想的な解釈者以上に、他者の発話意味や信念について知りえる可能性はないとされるのである。

根元的解釈における基本的な前提をまとめておこう。それは、[1] 意味は解釈者の視点から与えられる、[2] 証拠として利用可能なものは非意味論的である、[3] 発話の意味理解の仕方は根元的解釈が唯一の方法である。根元的解釈による意味理論の確証の手続きとは、未知の言語の意味を知ることが可能であるかを検証し、可能であることを前提として、その解釈が正しい解釈であることを確かめるための条件を探ることなのである⁶。

(2) 解釈図式のコミュニケーション理解への適用

本節では、根元的解釈におけるような図式が日常のコミュニケーションにも適用されることを確認する。それは「根元的解釈」論文において次のように示唆されている。

解釈の問題は同一の言語の話し手達の間にも次のような質問の形で現れる。言語が同一であることはいかにして決められるのか、と。同一の言語を話す話し手は、自分たちにとっては同一の表現が同じように解釈されるだろうと想定し続けることができるだろうが、この事実はそのような [=言語

が同一であるという] 想定を正当化してはいない。他者の発話の理解にはすべて根元的解釈がかかわっている⁷。

コミュニケーションにおける発話理解については「根元的解釈」論文以降、「墓碑銘の素敵な乱れ」などの論文を中心として明らかにされていく。そこでは、日常のコミュニケーションにおける発話理解の仕方が解釈図式によって捉えられる。

実際に話し手をどのように理解しているのかという（経験的）問題とそのような理解のために必要かつ十分な条件とはなにかという（哲学的）問題を私は今まで混同させてはいない。（略）日常において他者の意味することを次のような仕方で理解している、と私は考えているのではない。その仕方とは、相手が何を意味しているのかという疑問を意識的によく考えることや、何らかの解釈理論に訴えること、あるいは自分が重要な証拠だと見なすものを集めてくることによってなどである。そうではなく、ほとんどの場合には、私たちは解釈を意識的な努力をせずに、それどころか自動的にに行っているのである⁸。

デイヴィドソンによれば、第一に、日常のコミュニケーションにおいても解釈は行われており、私たちはそれを通じて他者の発話を理解しており、第二に、この理解は解釈者が意識的であるのかどうかとは無関係であり、概念的な記述なのである。

それでは、解釈図式に基づいたコミュニケーションの理解とは具体的にはどのようなものなのだろうか。それは聞き手（解釈者）が話し手の発声音に対して、相手に関する意味理論（「初期理論（prior theory）」と呼ばれる）を修正していくというものである。例えば私の「だいぶつかった」という発声を友人（P）が聞いたとしよう。P と私はそれまで、高価な洋服を購入したことを話題にしていたことや、そのほか数々の（明示的にせよ非明示的にせよ）情報を証拠として所持している。P はこのような証拠に基づいて私の発話を「お金をだいぶ使った」という意味であると理解する。このように、聞き手は相手の発声音と、

その発話された状況に関わる証拠を利用しながら、それまで持っていた意味理論（初期理論）を修正しつつ、相手の言葉を解釈するのである。

この初期理論は会話に先立って任意の人に等しく与えられるような定まった体系ではない。「だいぶつかった」と言う発話の例をもう一度取り上げてみる。ただし今度は、聞き手（Q）が私の友人ではなく、私と学校のクラスが同じではあるが、それまで私と一度も話したことがなく、また突然、私から話しかけられた場合を想定する。この場合、Qは私の発話の理解につまずく可能性が非常に高いといえる。というのも、先の友人Pに比べて、Qは私の発話に関する情報をほとんど所持していないからである。もしQがお寺の住職の家庭で育ち、日頃から大仏に慣れ親しんでいる人であったなら、初期理論で私の発話を「大仏買った」と理解するかもしれない。このように、初期理論とは会話に先立ってどのような人にも等しく与えられたものではないのである。さらに、初期理論は解釈者の理解しようとする相手によっても異なってくることも明らかである。

それでも、発話時の表現の誤用や新しい言葉との遭遇によってこのような初期理論では理解できないときがある。このとき初期理論に、その場限りの（ad hoc）解釈の変更を施す、すなわち、それまで構築してきたものとは異なる局所的な意味理論（「当座理論（passing theory）」と呼ばれる）を引き合いに出して話し手の言葉の意味を解釈する。例えば、Qは一人の青年が大仏を買うことは不可能であるという知識（解釈者自身の信念）や、私の発話時のイントネーションや区切り方（「だいぶつ、かった」ではなく「だいぶ、つかった」）などの証拠に基づいて、「だいぶ使った」という意味として解釈するだろう。このような当座理論は、毎回、その場で即席に遂行され、話し手の発話に関する限りの情報として調整される。もしも今回の即席の当座理論が今後も有益であると判断されるならば、その情報は相手の発話傾向の情報として蓄積され、相手に対するより精度の高い意味理論（「初期理論」）が構築されていく。こうしてデイヴィッドソンは意味理論について次のように結論する。「話し手が言葉を発するにつれて、解釈者は自分の理論を変え、新しい名前について仮説を立て、聞きなれた述語の解釈を変え、新しい証拠の発見のもとに特定の発話の過去の解釈を改訂するのである」⁹。

したがって、解釈図式において話し手と解釈者の間で共有されるべきものは当座理論であり、当座理論の一致こそが理解とされる。デイヴィドソンはこのことを次のように述べている。「コミュニケーションが成功するために共有されなくてはならないのは当座理論である。というのも、当座理論は解釈者が発話を解釈するために実際に使用する理論であり、話し手が、解釈者が用いるものと意図する理論だからである。これらが一致するときのみ、完全な理解が得られる」¹⁰。

この解釈図式における理解には、会話に先立って共有されるような規則の体系（「規約的意味 (conventional meaning)」と呼ばれる）を参照することは必要でも十分でもない (Davidson, 1994a, p. 2)。先に述べたように、初期理論は任意の人に等しく会話に先立って所持されているものではなく、相手や場所に応じて異なる。それに参加するのにあらかじめ共通の規則を身につけることが必要とされないという点では、コミュニケーションは、チェスやサッカーといったゲームとは異なっている¹¹。また、例えば「頭痛が痛い」や「あいつは神経が大きい」など、ある人に特有な語用にはじめて接するとき、規約的意味を知っていることはその語の理解に貢献してくれない。誤用や未知の表現を理解することに、規約的意味を参照することでは十分とは言えないのである。こうして解釈図式における理解とは次のようなものになる。「原則的にはコミュニケーションには、任意の二人が同一の言語を話すということは要求されない。共有されなければならないのは、話し手の言葉についての解釈者と話し手の理解である」¹²。

このコミュニケーションの発話理解の議論が根元的解釈における前提の三つ（[1] 意味は解釈者から与えられる、[2] 証拠として利用可能なものは非意味論的である（発話の意味はあらかじめ与えられていない）、[3] 発話の意味理解の仕方は根元的解釈が唯一の方法である）を踏まえたものであることは明らかだろう。デイヴィドソンは「私たちにとって反復して現れる唯一の候補とは、音のパターンについての解釈である。話し手と聞き手は繰り返し、意図的に、相互の合意をもって、関連する類似の音のパターンを同じように解釈しなければならない」¹³と述べる。聞き手が解釈者として知覚するものは非意味論的な音のパターンであり、デイヴィドソンによれば、共有されるべき意味とは類似の音のパターンについての解釈なのである。

本節のまとめをしておく。デイヴィドソンは解釈図式によってコミュニケーションにおける発話理解を描写する。それに基づけば、聞き手が発話を理解するという事は、話し手の振る舞いを証拠として、相手の発話についての予測を立て、解釈することで当座理論の一致に到達するという事である。

しかし、このような意味理論の一致に即した発話理解の仕方は、それが解釈図式を前提にしたものであることを考慮することで深刻な問題を起こしてしまう。次節でそれについて詳しく論じることにしてしよう。

II. 解釈的理解の論理的不可能性

解釈図式によれば、聞き手と話し手との間には間主観的な意味が想定されず、言葉の意味は類似的な音の解釈によって導き出される。この前提から帰結する問題点を挙げることで、そのような発話理解が擁護できないものであることを論じる。まずデイヴィドソンによる意味理論（以後、必要のない限り、初期理論と当座理論を区別しない）による理解と字義的な意味（literal meaning）との相違を明確にした後に、言葉（の意味）についての誤りを指摘することや言語表現について評価を下すことが論理的に不可能であることを明確にする。そして、その理由として、会話の当事者たちは、お互いの意味理論が一致していることを認識的に正当化することができないことを指摘する。

(1) 意味理論と字義的な意味

解釈者の利用するものは音のパターンであり、発話の意味理解とは解釈による一致とされていた。例えば、話し手の「amegafuru」という発声音にはもともと意味がなく、解釈者はさまざまな証拠をもとに、「雨が降る」という意味を得る。おそらく日本人が話す言語に日頃から慣れ親しんでいる人なら、ほとんどこの意味は共有されている可能性が高いとってよいだろう。

この意味理論から得られる理解は解釈以前に想定される字義的な意味という概念とは異なる。デイヴィドソンはそのことを次のように説明している。

意味（発話が字義的に意味するものについて話題にするときに関心を持つ

特別な意味において)は誰かが自分の言葉がある仕方理解されることを意図(想定、または予期)し、そして実際そのように理解される状況によって息を吹き込まれる。このような場合には、躊躇なくこう言うことができる:話し手が理解されることを意図し、そして実際に理解された仕方こそがその場合に、話し手またはその言葉が字義的に意味することである。(略)したがって、私にとって、言葉や文の「意味」という概念は話し手が自分の言葉を理解されるよう意図し、聞き手がそれを理解するという事に収束する。理解が意図と一致するときには、こう言ってよければ私たちは「まさにその」意味について話すことができる。しかし、意味を与えるものは理解のほうであって、その逆ではないのである¹⁴。

私たちは日常の会話における「雨が降る」、「おはよう」といった言葉を字義的な意味を参照することによって、その言葉を理解していると考えがちである。しかし、デイヴィッドソンによれば、それは説明の順序を逆にしている。むしろ、ある発声音やインクの染みを「おはよう」とか、「雨が降る」と理解するのは、話し手と聞き手の間でこれまでずっと意味理論が一致してきたからであり、理解の一致によってインクの染みや発声音をある意味として理解できるのである¹⁵。字義的な意味とは、私たちが解釈することで得られている意味理論が一致することに支えられているのであり、話し手と聞き手の理解が一致することが字義的な意味に先行しているのである。

解釈者と話し手との間で意味理論の一致を得るためには、両者が認識の仕方を大体において共有している必要がある。例えば根元的解釈状況では、「おはよう」という意味を理解するために字義的な意味(の共有)を利用することはできないため、このような状況で相手と意味理論を一致させていくプロセスにおいては、発声音を含めて世界をどのように知覚するのかという状況の証拠を利用するしかない。もし話し手と解釈者がお互いにあまりに異なる認識の仕方をしているならば、音のパターンの解釈を一致させていくことは絶望的に困難になってしまう。それでも、根元的解釈状況とは異なり、日常的な会話では、解釈者は相手とより似た認識を共有していることを前提にすることができるであろうし、実際にそうしているから多くの言葉の解釈が一致していると考えるこ

とができる。しかしながら、程度の差はあるにせよ、解釈図式による意味理解には、両者における認識の仕方が非常に重要なものとして関わっている。

(2) 誤りを指摘できない、あるいは評価できない¹⁶

このように特徴付けられる解釈図式による発話理解では、意味の誤りを指摘すること（および、そのほか意味について評価することなど）が論理的にできないということが帰結してしまう。誤りの生じる可能性としては、認識のレベルと意味のレベルでの誤りの二つが挙げられよう。このうち、解釈図式に従えば、後者、つまり他者が意味の誤りを指摘することができなくなってしまうのである¹⁷。

この誤りの指摘の不可能性は、経験的なものではない。私たちは日常において、話し手の発話が単なる言い間違いに過ぎないのか、聞き慣れない話者の意図したとおりの言葉であったのか迷うときがある。このような誤りの指摘に迷ってしまうということが意味するのは、発話の字義的な意味の理解があらかじめ共有されているという前提の上で、聞き手が話し手の発話を字義的な意味として発話された（したがって、字義的な意味の誤りである）のか、特別な意味で意図された（したがって、字義的な意味に誤りはなかった）のかを、判断することができないということである。例えば、デパートのエレベーター近くで友人が「エスカレーター発見！」と言うのを聞くと、聞き手はその発話が字義通りに「エスカレーター」を意味しているのか、「エレベーター」を意図しているのかの判断がつかないという場合が挙げられる。この場合、どちらの場合においても、話し手と聞き手の間で「エスカレーター」という意味が共有されており、話し手の発話がその字義的な意味であるのか、意図した意味であるのかを決定できないということなのである。

それに対して、誤りの指摘が論理的にできないということは、話し手の発声音が字義通りの意味であるのか意図した意味であるのかを区別すること自体が意味をなさないということである¹⁸。解釈者は非意味論的な音のパターンを知覚し、利用できる証拠を考慮して、それをある意味として解釈し、話し手と共有されている意味理論であると想定する。この図式において、発声音にどのような意味が与えられるかは解釈者の視点に依っている。話し手の発声音は、解

釈者の視点から解釈されるべき真なる発話とみなされる可能性をつねに残している¹⁹。つまり、一致されるべき意味理論とは、徹頭徹尾、解釈者が知覚した音のパターンからの、解釈者の側から想定した意味なのである。

もっとも解釈図式の発話理解においては、認識の正当性（寛容の原則）だけではなく、全体論的な合理性（rationality）を加味することも要求されているのではなかったか。この合理性という規範性に照らして、発話意味の誤りを指摘することが可能なのではないだろうか。しかしながら、合理性という原則はトークンとしての発話に適用されるものではないということから、誤りの指摘を可能にすることはできない。合理性が適用されるのは、個々の「文 S」についてではなくて、「文 S によって述べられていること」についてである（飯田, 2002, p. 12）。例えば、夏は暑い季節だ、暑い季節にアイスを食べる、という信念内容から、夏にアイスを食べるという信念も持っていると考えerことは合理的である。ところが、ある人が上記の命題を発話した場合にはどうだろうか。解釈図式によれば、トークンの発話意味は命題内容とは異なり解釈に先立って決まっていなない。したがって前提文における「アイス」という語の意味と、結論文における「アイス」という語の意味に同一性が保証されていないため、トークンとしての発話に合理的な原則を適用しても、意味の誤りを指摘することは不可能なままである²⁰。

意味の誤りの指摘不可能性は、解釈者が話し手の発話についての意味理論が共有されているということに対する正当化された信念を持つことができないという理由による。解釈者の意味理解は音のパターンの知覚によるのであって、その音の解釈によって導出された意味理論が話し手のそれと同じであることを確信することはできないのである。ある発声音が「おはよう」を意味するのは、習慣による規約的意味を参照することを本質的な根拠としてみなさない限り²¹、あくまで解釈による理解は、偶然による一致に支えられていることになる。

デイヴィッドソンは「話し手と聞き手は繰り返し、意図的に、相互の合意をもって、関連する類似の音のパターンを同じように解釈しなければならない」²²と述べていた。しかし、デイヴィッドソンの解釈図式における解釈者は「繰り返し、意図的に、相互の合意をもって」解釈できているという認識的な確信の根拠をこそ求められているといえるだろう。解釈によって導出された意味は話し手の

導出したそれと一致しているとも、していないとも言えないということから、これまですべて一致してはいなかった、もしくはたまたま一致していたという可能性を想定することができる。そして、前者は言うまでもなく、後者のような場合をも言語「理解」とはみなすことはできないだろう。

ルポアによれば、言語的な意味理解には、ただそれを解釈し、たまたま成功していただけでは十分とは言えない (Lepore, 1999)。言語的「理解」には、その意味を実際に聞いたということに対して正当化される、もしくはそれを知っているという信念も必要であろう。例えば聞き手がメタファーに対して「ぴったりの表現だ」とか「まさにそう！」といった反応を返すことは話し手の発話の意味を確信しているからできる²³。ところが、相手の意味を確信する信念は、デイヴィドソンの解釈図式では得ることができないのである。

これまでのまとめをしておこう。デイヴィドソンの解釈図式では言語的意味理解とは解釈による意味理論が一致することであった。ところが、それに従えば、意味理論が完全に一致していない可能性、もしくは、たまたま一致しているだけである可能性を排除できないのである。解釈者は自分の理解した意味理論が他者と共有されていることを認識的に保証することのできるような第三者の立場にはいない。デイヴィドソンが「個人言語 (idiolects)」として挙げている言い間違いや、未知の言葉の理解とされる例は、いずれも文法的な間違いや、人称に関する小さな違いに過ぎない²⁴。そこで発話の間違いに気づき、それでも理解することができるということは、それらが英語という言語からの逸脱に過ぎないという確信的な信念がどこからか前もって輸入されてしまっていると言えるのではないだろうか²⁵。しかしながら、解釈図式において規約の意味はコミュニケーションにとっての構成的条件ではないことを考えれば、そのような想定は論点先取である。解釈図式においては、解釈者および話し手は、互いに相手の意味理論であると導出したものが相手の意味理論と一致しているものであると思うことしかできないのである²⁶。このような意味で、解釈図式におけるコミュニケーションの発話理解とは観念論的であると言えよう。

この観念論的コミュニケーションは、後期のデイヴィドソンによれば、話し手と聞き手の信念は世界の出来事や対象から因果的に引き起こされ、大体において真であるということがアプリアリに認められることによって成功が保証さ

れる²⁷。このような主張が認められるならば、世界のあり方についての信念が大体において真であり、かつ共有されていることに基づいて、類似的な音のパターンの解釈による意味の誤りが指摘可能になるのかもしれない。だが、このようなデイヴィドソンの言語理解が次のような図式に基づいていることは明白に思われる。それは、一方に非意味論的な音という存在を、もう一方に解釈によって得られる意味（理論）を想定し、両者の間隙を、別のアプリアリな根拠によって正当化しようとする二元的な図式である。

最後に、これまで指摘されたことから、デイヴィドソンの議論のどのような点にどのような変更が迫られているのかを簡潔に見ておくことにする。

III. 解釈的理解から知覚的理解へ

これまで述べられた解釈図式の問題は、コミュニケーションにおける理解、つまり意味理論の一致にかかわることにあることから、根元的解釈プログラムそのものではなく、根元的解釈で示されたような解釈図式を日常のコミュニケーションにおける発話理解に適用したことにあると考えられる。つまり問題の焦点は、根元的解釈プログラムそのものにおける前提（[1] 意味は解釈者から与えられる、[2] 証拠として利用可能なものは非意味論的である、[3] 根元的解釈における発話の意味理解の仕方は解釈図式が唯一の方法である）にではなく、そのような解釈図式をそのまま日常のコミュニケーションにも適用しようとしたことにある。

ダメットのデイヴィドソンへの批判は [2] を受け入れた上で、[1] がコミュニケーションにとっての十分条件を満たしていないという批判であったように思われる (Dummett, 1978)。この批判に対するデイヴィドソンの応答がたとえ有効なものであると考えられるとしても、II 節において、なお解釈図式によるコミュニケーションの理解に問題があることが示されていた。もちろん規則には、ゲームの参加に必要とされる既存の規則だけではなく、これから解釈者と話し手の間で（明示的にも非明示的にも）作り上げられていくような規則も考えられるだろう。しかしながら、そのような規則の創造が、一方に規則をおき、もう一方に意味という存在をおくような二元的な構図であるならば、一方が他

方を根拠付けるための別の根拠という存在が要請され、再びデイヴィドソンの二元的な解釈図式と同様の落とし穴が待っているように思われる。私は、問題は[1]、つまり解釈図式そのものではなく、デイヴィドソン、そしてダメットも暗黙の内に受け入れていたと考えられる公理[2]にあると考える。つまり、知覚段階において非意味論的な音のパターンが受容され、解釈段階においてそれが解釈により理解されるという想定にこそ問題があると私は主張したい。

ラブレターを持つ次のような宇宙人を想定してみる。あなたが根元的解釈のような状況に突然置かれて、しばらくすると、自分と全く様子の異なる人(宇宙人)と遭遇したとする。あなたは、なんだかよくわからないままに紙を渡される。あなたがそれに目をやると、そこには「まえからあなたのことが好きでした」と(いう筆跡で)書かれている²⁸。そのときおそらく、あなたは思わず「えっ?」と思ってしまうのではないだろうか(ドキッとする人は…いるかもしれない)。これはあなたがまさにそれを読み、理解したからである。しかしながら、解釈図式で考えるとこの事態はあまりに不合理なことである。というのも、第一に、あなたが知覚するのはインクの染みや発声音である。第二に、置かれている状況が全く日本と異なる環境であり、目の前にいる相手はそれまで会ったことのない身なりをした銀色の宇宙人である。第三に、あなたは宇宙人についての全体論的な信念(そして言語・規則)に関する情報を一切持っていない。ここでは、あなたの利用可能などのような証拠からも、書かれたインクの染みの意味を「宇宙人が昔から解釈者のことを好きだった」という意味に解釈することは不可能である。

もちろん、そのようなインクの染みは実際には、解釈者がはじめに読んだときに理解した意味ではなく、宇宙人語の「即刻立ち去れ!」というメッセージであることが後からわかることはあるかもしれない。しかし、このとき宇宙人が初めて会った自分のことを好きであるはずはない、あるいは宇宙人が自分の使用する言語を使うはずはないといった理由によって、異なる意味であるはずだと考えることはできない。というのも、そのような議論は「まえからあなたのことが好きでした」という意味理解をすでに前提にしてしまっているから。解釈図式によれば、紙切れに書かれているものはインクの染みにすぎないのである。

問題の焦点は、なぜ解釈者が初めて遭遇した宇宙人語を見るやいなや、「まああなたのことが好きでした」という意味で解釈してしまったのかについての概念的な説明にある（もちろん、そのように理解することはありえないと言うならば、この問題は生じない）。このような想定において本質的なことは、第一に、利用可能な状況を参照すると、解釈者が理解した意味理論はまったく不合理な帰結であるということ、第二に、そのことを解釈者自身も十分に認識しているにもかかわらず、宇宙人に渡された手紙を見るや、これまでに熟知した言葉で読んでいるということである。解釈図式による言語理解の仕方では、これらのことを説明することはできないように思われる。

これらのことから、解釈図式の問題は [2] の条件の適用、つまり、私たちが知覚するものは必然的に非意味論的な存在であるという想定にあると考えることは理にかなっているだろう。解釈図式に従って、必ずしも非意味論的な存在を知覚する段階を経て、解釈者が内的に意味理論を築くのではなく、私たちが世界からなにかを知覚する時点で、知覚されるものは理解されると私は考える。このような概念を知覚的理解と名づけよう。本論文では、この知覚的理解について詳細に論証することはできないが、最後にこの知覚的理解がどのような概念になりうるのかを簡単に示唆しておく。

知覚する主体を抜きにして定義される字義的な意味に対し、知覚による意味理解は主体と環境との相互的なかわりによって変化する。だが、その意味理解が主体にすべて依存するわけではなく、知覚されるものは主体がどのような言語を使用する生活にかかわるのかに応じて変化するものであると考える。例えば、文字を書くという習慣を共有し、生活の中で用いられる文字（筆跡や形式など）の多くを共有するような話し手と解釈者の間には、間主観的な知覚の意味を想定することができると思われる。

もちろん、例えば「ギャバガイ」のように知覚的理解では意味が理解できない言葉はつねに存在するだろう。ただし、ここでは根元的解釈のような未知の言語に遭遇する状況を考えているのではないことに注意する必要がある。おそらく、生活の仕方の多くを話し手と共有する解釈者は、相手が非意味論的な発声ではなく、「ギャバガイ」という言語を話しているということを直接に知覚する（したがって、「ギャバ」をチョコレートの「GABA」、「ガイ」を男と解して

「GABA 男」と理解するようなこともあるかもしれない)。話し手が、その言葉によって何を意図しているのかという作業は再「解釈」という作業と呼べるかもしれないが、デイヴィッドソンの意味する「解釈」とは異なる。というのも、デイヴィッドソンの解釈が概念的であるのに対して、この「解釈」が意味するものは、解釈者が「ギャバガイ」という言葉を知覚したうえで、それがどのような意味であるのかを考え、例えば「ファミコン」を意味することに気づくというような有時間的・心理的なものだからである。

ここまで簡潔に知覚的理解の可能性について示唆してみた。このことの詳細はさらに別に論じる必要があるが、拙論はひとまず、ここでまとめとしておく。拙論で示したことは、解釈図式による他者の発話理解において、解釈者は意味なるものに対して誤りの指摘や評価を下すことができないということである。その問題の原因は、解釈図式的前提 [1] ではなく、知覚されるものはつねに非意味論的であるということにあると論じた。根元的解釈と日常の発話理解との相違は、この「知覚」概念の依拠にあるだろうというのが私の論文で示唆したことである。

註

¹ Ernie Lepore and Ludwig Kirk (2005)を参照した。

² Davidson (1994b), p. 126.

³ このことはErnie Lepore and Ludwig Kirk (2005), Chap. 11, Heil (1997), p. 175 で指摘されており、詳細に論じられている。

⁴ Davidson (1984 [2001]), p. 128.

⁵ Davidson (2001), p. 148.

⁶ 根元的解釈の手順や、それに関わる問題についての詳細はErnie Lepore and Ludwig Kirk (2005), Chap. 11 参照。根元的解釈プログラムにおける根元的解釈者から見て確証可能な条件を満たすということが正しい解釈を導出するのに十分な条件となっているということもアプリアリに正当化されていない前提である。というのも、理論が解釈的である (interpretive) ことが保証されておらず、さらに根元的解釈において主要な役割を課される寛容の原則 (principle of charity) 自体が正当化される必要があるからである。

⁷ Davidson (1984), p. 125.

⁸ Davidson (1994a), p. 3.

⁹ Davidson (1986), p. 441.

¹⁰ Ibid, p. 442.

¹¹ デイヴィッドソン批判者の一人であるダメット (Dummett, 1978) は言語使用をゲームとのアナロジーを用いて説明している。

¹² Davidson (1986), p. 438.

¹³ Davison (1984 [2001]), p. 277.

¹⁴ Davidson (1994a), pp. 11-2.

¹⁵ 例えば私が根元的解釈に置かれたとき、全く見知らぬ人々に「おはよう」と声をかけてもその意味は伝わらない可能性が高い。

¹⁶ 本節における正誤の判断の不可能性の議論は野矢 (1998, 1999, 2005) の議論に負うところが非常に大きい。ただし、「意味」についての指摘は、実際には正誤の判断ではなくても、ある比喩表現が「びったりだ」、「ニュアンスが違う／そぐわない」といった評価の判断でもよい。また、解釈図式において生じる問題を引き受けたいうえで解決しようとする方向性（私は「知覚」概念を抛り所にする）も異なることを述べておく。

¹⁷ このことは意味レベルだけではなく、認識レベルにも大きく関わってくることを指摘しておく。解釈者は話し手と意味理論が共有されていることを確信できないため、他者との認識の食い違いや新しい見方を発見することはできない。例えば、解釈者がアヒルとウサギの反転絵（ジャストロウ図形）において、アヒルと見なせることを知らず、ウサギという見方のみ気付いているとする。彼は、（同じ絵を見た）他者の「アヒルだ」という発声をどのように理解するだろうか。おそらく解釈者は、この他者のことを自分が「ウサギ」で意味するものをアヒルと言う人なのだと理解するしかないだろう。

¹⁸ 野矢はこのことを次のように述べている。「デイヴィドソンの図式のもとでは、発話は、そしてまた発話に用いられた文は、理解できるかできないか、それだけであり、正しいも誤りもありはしないのである」（野矢 1999, p. 363）。

¹⁹ デイヴィドソン自身の解釈による理解の例を見てみよう。「ある人が十分な照明の下で注視されているフクロウ (owl) によって「ムクロウ (fowl) がいる」という文を真と見なすようにきまって促されるとしたら、他の事実が次の解釈とびったりしているならば、話し手は「ムクロウ」という言葉でフクロウを指示するというのが最も良い仮説 (the best hypothesis) である」(Davidson, 2005, p. 45)。解釈図式では、解釈者の視点から見て話し手が合理的であると言えるように「寛容」が発揮される余地がつねにあると言えよう。

²⁰ 例えば、解釈者が結論文の「アイス」を「ライス」と理解することはそれほど不合理ではないだろう。あるいは、友達が冗談を言おうとして結論文の「アイス」を「ライス」と発話しても、解釈者は親切にも（話し手の冗談としての意図を理解せずに）彼は「アイス」を意味しているのだと理解してくれるかもしれない。

²¹ しかし、規約的意味はデイヴィドソンにとって構成的な条件ではないことは先に指摘した。

²² Davison (1980), p. 277.

²³ デイヴィドソンは隠喩（メタファー）について次のように述べるが、その主張は自身の解釈図式と矛盾してしまっている。「メタファーを他と区別するものは意味ではなく使用である—この点では、メタファーは主張や暗示、嘘、約束そして批判などと変わらない。（略）メタファーは表面上示しているもの—たいていは誰が見ても明らかな誤りや言うも愚かなほどの真実—を述べるに過ぎない。（略）その意味はその言葉の字義的な意味において与えられるのである。」(傍点著者) (Davidson, 1984 [2001], p. 259)。しかし、メタファーがメタファーであると理解されるためには字義的な意味の理解が前提にされなければならない（それに基づいて、解釈者はその言語表現をメタファーであると理解する）が、解釈図式による理解においては、そのような字義的な意味は

任意の人に共有される前提ではない。

- ²⁴ 例えば “The phenomena is ...The date is...The octopi are...,” (単複数形の誤り)、“He wented to the store,” (動詞活用)の誤りが例として挙げられている (Davidson, 1994a)。
- ²⁵ 「英語という言語」ではなく「初期理論」からの逸脱に過ぎないのではないかと、という批判はできない。というのも、初期理論は任意の人に同じものが与えられているものではないのだから。誰かが「頭痛が痛い」と言っても、解釈者はそのような意味理論があるのかもしれないと理解することしかできず、誤りであると指摘することはできない。
- ²⁶ この「思う」は心理的ではなく認識論的である。
- ²⁷ この議論については Davidson (2001, pp. 137-75) において中心的に論じられている。拙論ではこの内容についてこれ以上触れることはできない。
- ²⁸ 「まえからあなたのことが好きでした」という発声を聞くことでも事態は同じである。

参考文献

- Davidson, Donald (1984 [2001]), *Inquires into Truth and Interpretation*, Oxford University Press. 2nd.
- (1986), “A Nice Derangement of Epitaphs,” in Ernie Lepore (ed.), *Truth and Interpretation Perspectives On the Philosophy of Donald Davidson*, Basil Blackwell.
- (1994a), “The Social Aspect of Language,” in Brian McGuinness and Gianlugi Oliveri (ed.), *The Philosophy of Michael Dummett*, Kluwer Academic Publishers.
- (1994b), “Radical Interpretation Interpreted,” in J. Tomberlin (et al), *Philosophical Perspectives: Logic and Language* (vol. 8, pp. 121-8), Ridgeview.
- (2001), *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford University Press.
- (2005), *Truth, Language, and History*, Oxford University Press.
- Dummett, Michael (1978), “Truth,” *Truth and Other Enigmas*, Gerald Duckworth.
- Heil, Jean (1997), “Radical Interpretation,” in Bob Hale and Crispin Wright (et al.), *A Companion to the Philosophy of Language*, Blackwell Publishing Ltd.
- 飯田隆 (2002)、『言語哲学大全 IV 真理と意味』、勁草書房。
- Lepore, Ernie (1999), “Davidson and understanding language,” in M. de Caro (ed.), *Interpretations and Causes: New Perspectives on Davidson's Philosophy*, Kluwer Academic Publishers.
- Lepore, Ernie and Ludwig Kirk (2005), *Donald Davidson: Meaning, Truth, Language and Reality*, Oxford University Press.
- 野矢茂樹 (1998)、「言語ゲームと言語ゲームの間」、『現代思想』26号(1)、pp. 90-8。
- (1999)、『哲学・航海日誌』、春秋社。
- (2005)、『他者の声・実在の声』、産業図書。

(さとう くにまさ／東京大学)